

「200年後を生きる僕へ捧げる日記」

僕の知り合いには不思議な先輩がいた。空気と音から創られたかのような、人間であることを疑ってしまうような、どこかの天才の研究対象になってそうな、そんな人だ。

僕と先輩は同じ学校の生徒であり、学内の非公式文学同好会のメンバーでもある。

そんな先輩が開催する「対談」と称した活動の記録を、そろそろまとめようと思う。

追記 小さなカードに書いていたので順番がバラバラになっていたらすまない。

四月一四日

今日、先輩と出会った。なんとなく音が面白くて入った同好会だが意外と楽しいかもしれない。今日は最初ということで学校近くの公園に行った。もう春なのにそこそこ寒く、僕はカーディガンを着ていたのに、やってきた先輩はもう半袖という強気の姿勢だ。寒くないのかな。

先輩が大きな桃を買ってきていて、それを食べながら善悪について話した。

— 鬼は何故盗んでいた？

— 主人公の正義感是谁が育てたと思う？

的なことを言われた気がする。結局対談が終わる前に桃は全て食べてしまった。

四月二〇日

ねこ、こうもり、と繰り返しながら歩く先輩と一緒に学校から少し遠くにある薔薇園を散策した。先輩は何故か正装で胸元に薔薇をつけてやってきた。僕が理由を聞いても「推理をするのだよ」とこれっぽっちも教えてくれない。本については詳しくないんだけど。

昼食は先輩だけが知っているという秘密基地で食べた。先輩お手製のハチミツトーストとクッキーを僕も少しだけもらえて嬉しかった。ただ、流石に秘密基地への流石に移動手段が落下なのは勘弁してほしい。落とし穴で隠していると聞いていたがよく考えると足元はコンクリートだった気がする。対談自体は秘密基地で、トランプをしながら行った。

「先輩くんよ、童話における教訓の必要性とはなんだと思う？」だった気がする。

先輩の思考回路というものが未だに理解しきれていない。

五月一五日 晴れのち曇り

対談場所は学校横の大桜の丘。対談対象の本は、先輩の好きな作家のものらしい。

桜の下のことなんて考えたこともなかった。死体の血を吸っている仕組みなのだろうか？

先輩がよく言うグロテスクなもののおもしろさが僕はわからないが、先輩が美しいと思うなら美しいのだろう。まさか移動手段として大穴に落とされるとは思わなかったが先日的一件で慣れてきた自分があるのが少々怖い。

五月三〇日

今まで本の具体的なタイトルを教えてくれない先輩だったが今回ばかりは流石に教えてくれた。満月の夜に対談だったが先輩の飼っている犬（とはいえないような謎生物。先輩は犬と言いつ張っていた）を連れてきて「君はどの作品が好きかな？私は蛤 ハマグリ」の話かなあ」と言われても全く訳がわからなかった。分かる人には分かるのだろうが、テーマが明かされない会話は主催不在のパーティを見ているようでどうしてもムズムズしてくる。

これ、数十年後に日記を読み返した僕はなんの本かわかるだろうか？気になるのでタイトルは伏せておく。

六月一六日

先輩は梅雨だ！嫌だ！と部室がわりにしている空き教室を走り回っていた。どうやら雨が降っていると外に出られないらしい。ので、この日はお互いが雨テーマの漫画を持ち寄って読み合いをした。先輩から渡された本の内容はドロドロとして先輩の心情をそのまま表したかのような……。家に帰ってからタイトルを検索したが一件もヒットしなかった。“雨”とか“霁”とか単語に漫画をつけて検索する分にはいくらでもヒットするのに。

七月三一日 快晴

夏休みだった。久しぶりに会う先輩はチョークで髪を七色に染めていた。

数ヶ月ぶりになる対談だったが、議題と一緒に沢山の本を持ってきてくれていたので一日中語り合えて幸せだった。少々暗い顔をしていたので理由を聞くと、飼っていた犬（のような生き物）が三ヶ月近く前に死んでしまったそうで、日は前後するが今日はその命日らしい。

対談の後は一緒にお墓に行った。

先輩は年末に地元へ帰るらしい。どうやらかなり遠くにあるようで、年末には完全にお別れになるらしい。先輩も最高学年だし、引越しの準備などあるんだろう。

八月三日

いい日和の、蝉のうるさい暑い日。普段の体感温度がバグっている先輩も流石に暑いのか、足まである長い白髪をくるくるとまとめ、下の方でポニーテールにしていた。

今回の対談は、河童は存在するのか？という直接的なお題だった。先輩は熱心にまだ理解の追いつかない精神とか、病気とか、歴史について語っていた。これはこういう暗喩だ、こういうところが面白い、とか普通の話もしたけど。町外れの川でやっていたせいか先輩は持ってきていたきゅうりで河童を釣ろうとしていた。無理だろう。「いい食料になる」とか言っていた気がするが、本当に河童を食べる気なのだろうか？それとも河童巻をネタにボケたのだろうか？

帰りに回転寿司で河童巻と鉄火巻きを一皿ずつ奢ってくれた。おいしかった。

追記今年の最高気温だったらしい。

八月四日 曇

「対談をしようか」とだけメールが入っていた。

お昼頃に先輩は家にやってきた。手土産のプリンと桃のゼリーを食べながら、魔女について議論した。議論が終わった後は、うちにあるお菓子でお菓子の家を作った。

先輩曰く、人間は魔法を使える日は来ない、と。扱えるようになった技術は全て「カガク」という名称に変わるかららしい。以前先輩が教えてくれたのでなんとなく理解しているが、まだまだ先輩には及ばない。そういえば、薄々気づいていたが先輩はもしかして料理上手なのかもしれない。今日のプリンもおそらく手作りだろう。僕も立派な大人になるため練習しなくては。

八月一五日 快晴

今年一番暑い日だった。家のポストに本に挟まれて封筒が投函されていた。

もちろん先輩からだったが、中身は手紙ではなく写真だった。いつの間撮っていたのか今までの対談の写真で、懐かしいものばかりだった。一緒に桃を食べた写真や先輩の犬(仮)

と一緒に撮った写真、河童釣り、髪がレインボーな先輩、焼き芋会、雪国旅行、など色々な思い出の写真だ。対談ではないが、嬉しい出来事だったので日記に書いておく。

数年後の僕へ。この写真は全てアルバムに入れてあるので研究室を探せば出てくると思うよ。

九月三一日 雨

先輩と連絡がつかない。

雨だから何かあったんだろうか。学校にも来なかった。

九月三五日 雨

今日も連絡がつかない

はやく雨がやんでほしい

十月一日

先輩が句集と焼き芋を持ってきていた。まさか本を燃料にするのかと思っただけど、先輩は句集を僕に読ませながら落ち葉を集めているのを見た時はホッとした。俳句は初めて読んだけど結構面白い。焼き芋を食べながら先輩の解説を聞いて、音や表現技能について語る先輩の顔はどこか寂しそうだ。秋の風は当たっていると催眠術みたいに寂しい気持ちになってくる。そのせいかもしれない。

続